

# 西宮神社十日戎開門神事における1930年代・40年代の変遷

荒川 裕紀

## Historical transition of TOKA-Ebisu “Open Gate Ceremony” in Nishinomiya Shinto Shrine

-From 1930's to 1940's in Hanshin industrial area-

### Abstract

TOKA-EBISU “Open Gate” Ceremony, which is Nishinomiya Shinto shrine’s annual ceremony held at 6:00AM, January 10<sup>th</sup>. After grand gate was opened, participants run from grand gate to main shrine (the distance is about 230m). After this competition, Nishinomiya shrine recognizes the persons from the 1<sup>st</sup> place to the 3<sup>rd</sup> place as “FUKU-OTOKO (Person with Happiness)”. Nowadays, more than 6000 people participate in this ceremony, and this ceremony became the spectacular event in the Kansai area, Japan.

In this report, I traced the transition of the form of this ceremony from 1930's. Especially, I researched from the newspaper material and the shrine office diary around 1930-1945, how this ceremony did change in a social transformation since urbanization in Kansai area. Also I scanned phrase of “Fuku (Happiness)” “Fukuotoko (The person with happiness)” or “Ichiban-Fuku (No.1 Happiness)” from those documents. After that, I considered the factor of the transformation of this ceremony and meanings of this transformed ceremony in the society.

*Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shrine, Nishinomiya, Hanshin industrial area, modernization, urbanization, Fuku (Happiness)*

### 1、はじめに

当論考では、現在毎年1月10日に行われる兵庫県西宮市にある西宮神社で行われる、西宮神社十日戎開門神事について、1930年代から1940年代、とくに太平洋戦争敗戦後までの変遷を新聞資料を中心として述べていく。昨年度の報告で、私は改暦・鉄道・電鉄がいかに神事を変化させたかについて報告した。それから以降、平山昇氏が2010年の3月に論考<sup>1</sup>を出された。内容としては特に明治・大正期の西宮神社の鉄道（省線）・電鉄（主に阪神電鉄）が、いかに十日戎に影響を及ぼしたかについて、社務日誌および大阪朝日新聞を使つての綿密な調査に基づいて調査なされたものであり、私の報告にも近い範疇である。

本報告では、平山氏の述べられた言説や文献をまず提示して1930年代以降の神事の変化への導入部としていきたい。その上で、今回の報告では現在の神事で報道される「福男」ないしは「一番福」といった語句に着目した上で、いつの時代から「福を求めて走る」といった報道がなされたのか、もしくはその神事の変化について見ていきたい。

特に前回の報告では、新聞資料としては主に大阪朝日新聞の記事からの言及を行ってきたが、今回新たな資料として、神戸新聞、大阪毎日新聞も対象にした。その中で得た新たな発見と、「一番福」「福男」という語がいつから作り出されてきたのかについて、大阪朝日、神戸新聞、および大阪毎日新聞の三紙を時系列的に比較し、紙面から見える世相を考慮した上で、「一番」「走る」ことに、なぜ重きが置かれるようになったかについて考察を行っていきたい。

### 2、近代(1868～1945年)における十日戎参詣に関する文献

前回の報告では、当調査対象（西宮神社十日戎）における先行研究としては、吉井良隆氏における戎信仰および十日戎に関する論考や田中宣一氏による全国の戎信仰に関する研究などを挙げ、その他には私のこれまで行った十日戎開門神事調査があると述べた。西宮神社のえびす信仰に關してもう1つ忘れてはならないのは、大江時雄氏の膨大な福神信仰の研究<sup>2</sup>がある。

そして昨年度の2010年の3月には、先ほど述べたが、平山昇氏が「明治・大正期の西宮神社十日戎」という論考を出された。特に平山氏の研究は鉄道（汽車）と電鉄（阪神・阪急）という鉄道による社寺参詣という側面から書かれたものである。前回の私の報告では、特に阪神電鉄（社務日誌における「電鉄会社」と新暦の十日戎の隆盛が関係あることを述べたが、平山氏の論考は当時の新聞資料の阪神電鉄の広告にも注目され、資料として挙げられている。当時行われていた「伝統を保持したい」神社側と「少しでも長く十日戎を行わせて、輸送収入につなげたい」電鉄側との葛藤がその中では記されている<sup>3</sup>。阪神電鉄および阪急電鉄のディベロッパー的な側面として語られる急速な郊外化が、阪神間を形成したのと同時に電鉄会社の持つ、あるいは持っていた性格である「社寺参詣のための乗り物」という側面が豊富な史料でもって見事に論じられている。

もう1つ気づかされた点は、1909（明治42）年の公文書の旧暦併記の廃止に関する平山氏の言説である。具体的には官庁などでの使用暦は、1873（明治6）年の改暦の際に

改められることとなったが、実際は農事暦でもある旧暦は社会の中で残ることとなり、公文書などでも併記されることとなっていた。それがなくなったのが、1909（明治42）年の旧暦併記の廃止であると平山氏は主張する<sup>4</sup>。これらの旧暦併記廃止が当時の社会の「時の感覚、年中行事」に変化をもたらしたとする言説は、旧暦併記廃止がこの祭りにもたらした「2つの十日戎（旧暦と新暦）の登場」に関して改めて考えさせられた<sup>5 6</sup>。国の政策とともに急激に変わりゆく社会、その変容の中で輸送手段である鉄道・電鉄が新たな祭りを創出していく。その過程で旧来の風習との葛藤があり、そして地元の人々も新たな祭りに価値を見出していく。

その「新たな価値」を見出す作業の中で、私が主に調査を行っている「開門神事」が見直されてきたのではないかな。特に平山氏の論文の中でも出てくる十日戎の「行われている時間、いわゆる開門している時間」と開門神事との関連は当報告でも注目していくこととする。

### 3. 開門時間の変遷、新暦十日戎の創始とともに

「電鉄が生み出した新暦の十日戎」について前回の報告で言及した。その中では伝統であった忌籠（居籠）神事が、新暦の祭りの中に移入されてきたことを主に述べた。特にその過程で門の果たす役割が大きくなってきたことに注目した<sup>7</sup>。それまでは新聞紙上でも余り大きくは取り上げられていなかった「閉門」そして「開門」が、大きく取り上げられだしたことを明らかにした。その理由として社会構造の変化を挙げた。

それと同時に平山氏の言説である電鉄と神社との間の「参詣の側面と居籠習俗の伝統との葛藤」<sup>8</sup>が大きかったことを今回出された論考を読むことで感じた。それは、「西宮神社の居籠習俗の伝統に頓着しない者たちが9日夜間にも押し寄せる様になり、神社側はこの伝統を保持すべく電鉄側に協力を求め」た。そのことによって昭和9（1934）年に新聞広告という形で閉門時間12時が明記されることとなった<sup>9</sup>。前回の私の報告では、明治41（1908）年の旧暦の十日戎に関する記事に「我第一の福を授からんと」して遠方より来た参詣客が泊り込んで「開門」を待つという記事を提示した<sup>10</sup>。そしてその後、新暦の十日戎でも同じように開門するようになった訳である。

この中で改めて気付いたこととしては、旧暦から新暦へと十日戎を移した際に同じように居籠祭を「伝統」として移している点である。新聞では明治43年以降の神社は新暦の十日戎を「初祭り」と称して正式にお祭りを行うこととなったと書いている<sup>11</sup>が、「初祭」と呼んでいることから、神社からすると、あくまでこれは「創始された祭り」である。新聞紙上などで「主祭」と呼ばれた旧暦の十日戎でのみ行っても構わないわけであるが、ここに神社がのちに電鉄会社との葛藤が現

われることとなる「居籠」の概念を同じように持ってきたことは、居籠あつての十日戎であると神社関係者は考えたのだろうか。

十日戎が西宮の地域の祭であった頃は日が暮れると閉門し、そこから居籠を地域全体で行い、神職は祭事を執り行う。そして夜明けと同時に開門され氏子は常時とは違う「ミカリ」の状態で参詣した。しかし、官鉄がひかれ、阪神電鉄が開通し、その後阪急電鉄が開通するようになると、地域全体の居籠神事から神社だけの居籠へと急激な変化を遂げていった。

米山俊直は都市祭礼のチェックリストとして「五つの要素、四つのニーズ、三つの社会関係、二つの時間区分、そして一つの目的」を挙げている<sup>12</sup>。西宮神社の十日戎においては、「2つの時間区分」つまり日常と非日常（西宮でいうミカリ）を隔てる機能を持っていたものとしては、変化を遂げる前から門であったと考えられる。しかし急激な社会変化の中、氏子地域が急激に産業都市として取り込まれていく過程で、自然と門の役割がその時間の分節化においてより大きな役割を担うようになっていったのではないかな。だからこそ平山氏の挙げた閉門時間が「参詣の側面と居籠習俗の伝統との葛藤」の象徴的な話題として、新聞紙上に挙がることとなったのであろう。

開門時間も明治41年2月12日の大阪朝日新聞神戸附録の旧暦の十日戎の記事では

「午前4時過ぎ式事全く終りて門を開けば篝火華かなる祠前は忽ち人に埋められて一時は身動きもならぬ有様。」

とあるように、境内での神事が終えた段階で門を開くとしか書いていない。それが新暦に「移入されると」大正3年には午前5時開門されていう様子が書かれ、大正9年に6時と定められるようになったのは、前回の報告でも書いたが、時間が定められていく過程として、閉める時間の葛藤が繰り返されたため、開ける時間もそれに伴って定めることになったと考えられる。

近代化が、新暦での十日戎を創始し、その中で、日常と非日常を隔てることのできる「門」という存在がクローズアップされることとなった。そしてまさに分節化を感じ取ることのできる「開門」が新暦の十日戎の中で重要な意味を持つことになったことが改めて確認された。

### 4. 昭和12年（1937年）の開門神事

前回の報告で私は、開門神事が行われる中で、田中太一氏という人物が、新聞紙上に現れる過程に迫った<sup>13</sup>。彼が、新聞紙上、そして社務日誌上においてはこの開門神事の中ではじめて現われる個人名であることを述べたが、今回改めて神戸新聞の史料や大阪毎日新聞の資料を得て、そして自身のこれまで持っていた大

阪朝日新聞神戸附録および阪神版を調べてみると新たな事実が判明した。それは、昭和 11 年の一番福の存在である。

前回の報告で紹介した田中太一氏の新聞記事の中で昭和 12 (1937) 年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版の中で、

「西宮へ来てから本年 37 歳まで昨年を除いて 16 回、覇権を獲得、めでたきレコードを樹立した」

とあったが、このなぜ「昨年を除いて」のだったのか、そして、昭和 11 年 (1936 年) の一番福の名前も判明した。日付が同年の昭和 12 (1937) 年 1 月 10 日の新聞なので、彼が新聞紙上に個人名が出たはじめての一番福ということになる<sup>14</sup>。神戸新聞の記事は以下の通りである。

「けふの開門は朝の 6 時、門内に備へられた三本の鈴を真先に鳴らした参詣者のその一年の運勢は大々吉との云ひ慣はしから開門前から福運引當の競争者で黒山の人垣をつくることだらうが去年は杜家町清田八三の長男三郎君がこの先陣を承り今年も第一番にならうとて手具脛 (ママ) 引いて意気込んでゐる。さて霧雨が晴れば今日の人出は幾十萬に上ることぢやろ」

そして同日の大阪朝日新聞阪神版には

「初物好きの阪神ッ兒、一番福が転がり込むとあつては、未明から寒さくらゐ何んの、雨が降つてもものともしない意気も、さこそと思はれる次第、さてけふ誰が一番乗りの鈴にぶらさがるか？ ここ数年間は西宮市久保町千足材木商店の田中太一さんが、多年の修練と、健脚にものをいはせて、よく諸豪を抑へて一番乗りの覇権を維持してゐたが昨年は家事の都合で欠席、同市杜家町清田三郎君に名をなさしめた、今年はこの両君もそろって出場するといふが、その他にも虎視眈々覇権を狙ふダーク・ホースも多いことゆゑ面白い場面が展開することであらう」

とある。新たに清田三郎氏<sup>15</sup> (年齢は書いていないが、保護者の名前も記しているところから未成年の可能性も高い) が現われたが、田中太一氏にしてもこの昭和 12 年に突然表れてくるのである。前回の報告では、大正 9 年以降、際立った記事は余らないと記しているが、大正 10 年と 11 年に関しては少しは言及がなされている。ここでは、大阪朝日新聞に現われた、開門に関する記載を表にしてみたい。

表 1 : 大正 10 年以降の新暦十日戎の開門に関する記事

年	新暦十日戎の開門に関する記事の内容
大正 10 (1921)	夜の十時ごろに門が閉ざされる、午前五時に吉兆屋の入場が許され、六時に一番参拝の入場が許される。それまでにはすでに数千の参拝者が門前に押し掛けているのが恒例
大正 11 (1922)	欲の皮の厚い縁起家は午前三時頃から門前に詰め寄せ開門を報知する三番太鼓がドンと鳴った午前六時には例年に劣らぬ二三百名が命懸けの雪崩を打って馳込み・・

特に気になるのは大正 10 (1922) 年の数千人が、いきなり

「例年に劣らぬ二、三〇〇人」に激減しているところである<sup>16</sup>。熱心に走って本殿まで駆ける人の数の意味で使っているのだろうが、その後いきなり記事が出なくなってしまうことと併せて関心がある。そしてこの 2 年の記載ののち、昭和 10 (1935) 年まで具体的な記載は、大阪朝日新聞からは途絶えてしまう。記事はもっぱら阪神電鉄と後発の阪急電鉄の集客競争、恵方によって今年は神戸から・大阪から参拝客が訪れたなどの記事、そして天気、景気による参詣客の増減に関するものばかりとなる。特に大正晩期から昭和初期にかけては大戦後の不況・昭和恐慌と重なっていたこともあり、不景気に関する話題と十日戎参拝を合わせている記事が多い<sup>17</sup>。なぜ、昭和 10 年まで開門についての言及が新聞紙上からなくなったのか、もしくはなぜ昭和 10 年に開門に関する記事が復活したのか。これからの研究を進める上でひとつのポイントとなるであろう。今報告では「昭和 12 年の開門神事の取り上げられ方」と「おわりに」で私なりの推論を行ってみたい。

## 5、「一番福」そして「福男」という語の新造

前回の報告では、主に大阪朝日新聞の中でいつから「一番福」という語が使われてきたかについて提示を行った<sup>18</sup>。この項では、現在では「開門神事」と呼ばれているこの神事が当時何と呼ばれていたか。そして現在では「福男」もしくは「一番福」という呼称が一般的な「一番に拝殿にたどり着いた参詣者」を何と呼んでいたのか。大阪朝日新聞・神戸新聞・大阪毎日新聞の 1 紙ずつ、いつくらいから用語が登場してきたのか、そしてどのような文脈でそれらの語が語られているのかを確認したい。

まず表 2 において大阪朝日新聞における表記を見たい。

表 2 : 大阪朝日新聞における表記 (神戸附録および阪神版)

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称
大正 2 (1913)	門開け・(偉大な福運を授かる) 先登者
大正 3 (1914)	午前五時の開門・一番福
大正 4 (1915)	(例年の通り) 祭典の式・一番福
大正 6 (1917)	本祭りの祭典を執行せり此時東門をサツと開くと
大正 9 (1920)	昔ながらの居籠祭と云ふのが行はれ六時開門と同時に・参拝者が第一の福
大正 10 (1921)	午前六時愈々宮門を左右に開かれて一般参拝、本戎の開門・鈴緒を逸早く手にしたものが其の年の第一の福德者
大正 11 (1922)	開門を報知する三番太鼓
昭和 10 (1935)	午前六時の開門、福争ひの競争・一番鈴の功名
昭和 12 (1937)	一番乗り競争・最初の福にありつかうと目ざす選手・一番乗り・一番福
昭和 13 (1938)	唐門の一番乗・一番福 (田中太一、尾

	松新之助)
昭和 14 (1939)	一番乗り (多司馬玖一)、二番乗り (多司馬圓之助)、第三位 (田中太一)
昭和 15 (1940)	争奪戦、一番福 (多司馬玖一)、一番乗り
昭和 17 (1942)	一番福争い、一番詣り、門が一文字に開かれ、一番に中央鈴縄 (山本伸吉)
昭和 18 (1943)	一番福 (東條洋三)、二番福 (上原平一)
昭和 19 (1944)	午前六時開扉
昭和 20 (1945)	恒例の拂曉一番参り (上田研蔵)

ここからまず看取できるのは、現在使われている「開門神事」の語句がないことである。2010 年 (平成 22 年) 現在でもそうであるが、神社側からみた十日戎の本祭とは、午前 4 時に境内で神職のみで行われている「居籠祭」である。もともとは氏子中すべてが居籠であったものが、都市の発展、社会構造の変化によって「門で閉ざした」境内で行われるということが顕著になった。

その中で門の役割が際立ってきたことはこれまで述べてきたが、この大阪朝日新聞を見る限りにおいては、開門自体を神事であるとは述べていない。門を開いたことによって非日常の世界が境内で繰り広げられる様については書かれているが、門だけに限って見た場合あくまで「門が開いた」事象のみを述べるにとどまっている。昭和 20 年の記述では時局の影響から「拂曉一番参り」とされている。

現在福男と呼ばれる人物の呼称も大阪朝日では終戦まで一番福、一番詣り、一番参り (昭和 20 年)、一番に中央鈴縄 (をつかんだ者)、一番乗りなどの語句が使われている。

次に、神戸新聞ではどうだろうか。

私が所蔵している資料の中では、神戸新聞に関しては、昭和 5 年の「福乞戎さんに 人の渦巻き」との題で

「宵戎に物凄い人出を見せた西宮戎神社では、明けて十日、本戎の正門をさつと開けば我こそ今年の福を授からんと意気込んで・・・」

とある。それ以降の記述について見ていきたい。

表 3：神戸新聞における表記

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称
昭和 5 (1930)	本戎の正門をさつと開けば・先を争って一番乗りの拍手
昭和 8 (1933)	今年は午前四時開門、サツと流れ込む参詣人は我先きにと一番乗りを拝殿に争うのを魁に
昭和 12 (1937)	「福運へ一番乗だ」三本の鈴を覗ふ暁のラッシュ」門内に備へられた三本の鈴を真先に鳴らした参詣者のその一年の運勢は大々吉との云い慣はし、第一番にならうと
昭和 13 (1938)	神前への一番乗り・一番詣で、結局二人 (田中、尾松両氏) が一番参りと極った
昭和 14 (1939)	恒例である一番福の争奪戦、縁起の一番

	福、拂曉六時の開門を前に一番乗りを待機する二百数十名の福貰ひ参詣人、神前の鈴縄タツクル戦、多司馬玖一君が福神トライの喊聲をあげた
昭和 15 (1940)	午前六時の赤門・正門 <sup>19)</sup> の開かれるのを目指し参詣の先陣を争ふ賓客、一番詣りの競争、一番乗りの競争、福運掴み、一番乗り (多司馬玖一君)、二番 (木村保蔵君)、三番 (近藤廉太郎君)
昭和 16 (1941)	早暁の午前六時のサイレンとゝもに開かれる門とゝもに恒例の一番福を目指して、一番詣り、一番福 (一ツ家重治君)、二番福 (途中転んだ多司馬玖一君)
昭和 17 (1942)	一番詣りが争はれ
昭和 18 (1943)	一番詣りの先陣争ひ、一番福 (東條洋三君)、二番福をつかんだ (上原平一君)

残念なことに、昭和 19 年以降の史料が見つけられていない。大正期の記事検索と同時に、これからの課題である。

この神戸新聞の記事で見えるのは、二番福という語を昭和 16 年ごろより使い出していることである。現在では一番福、二番福、三番福という名称を神社も使っているが、そのさきがけをこの新聞記事に見ることができる。大阪朝日新聞では昭和 18 年に使い出しており、このあたりから新聞社がその呼称を始めたと考えられる。大阪朝日でも「鈴」「鈴縄」に関する記載があったが、もう 1 つ大阪朝日で「唐門」 (昭和 13 年) との記述もある。これは、当時の一番詣りの経路が現在のそれと違うことに由来する。

現在では門が開いたのち、参道を走り抜けて、拝殿の正面から本殿へと突き進み、そこで神職に抱きつく形を取っている<sup>20)</sup>。しかしこの当時の経路は拝殿正面からではなく、特別に扉 (唐門) が開かれた拝殿の東側から入っていた。そこで一番にたどり着いた者が鈴をつかんで<sup>21)</sup>「戎様ただいま参りました」と参拝するのが一番詣りであった。

大阪朝日と共通することであるが、神戸新聞も昭和 12 年に突然、取り上げられ方が大きくなり、多くの紙面を割いていることに注目したい。

3 紙の最後として、大阪毎日新聞を見てみたい。

表 4：大阪毎日新聞における表記

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称
昭和 7 (1932)	早朝戎神社の開門を待つて一番詣りを目ざす参詣人は深夜から門前に詰めかけて先づ拂曉の神前をどつと賑はし
昭和 10 (1935)	この (10 日) 朝一番に拝殿の鈴紐を掴んだ参詣者は超特別の“福”がもらへるとあって折からの小雨にもめげず正門前に押しかけスクラム組んで待ちかまへてゐた求福の群は同六時發門と同時にサツと境内に流れ込み神鈴にタツ

	クルして福争ひを演じ早くも本戎の景気を煽つたが
昭和12(1937)	同五時ごろ滞りなくこの尊厳な祭典(居籠祭)を終了するが一方この朝第一番に本殿前の鈴紐を掴んだものには超特別の福が授かるとあつて午前二時ごろからぞくぞく正門前に押しかけ 太鼓の音を合図に西宮消防組員が内側からかんぬきを外すと朱塗りの正門からドッと境内になだれ込み本殿前に吊るされた三つの純白の鈴紐にモー然タックルして戎さんならではの景気よい福争ひ
昭和14(1939)	吉例によつて一番福を授からうとする福男の争覇戦、福男・一着(多司馬玖一君)、この一群には可憐なセーラー服の女學生も二、三人まじつてゐた
昭和15(1940)	未明午前六時を期して國寶表大門が開かれたが一番乗りを目ざす二百余名が約五町ををへだてた拝殿前の鈴の締めざして突進・開門を待つ名物”福男”(最近婦人も加わる)、二千六百年の一番福の勇士(多司馬玖一、昨年一等)
昭和16(1941)	一番福争奪レース・一番駆けの福男、福男(一ツ家重治君)、第二位福男(多司馬玖一君)、第三位の福男(牛原田信一君)
昭和17(1942)	吉例の一番福争ひ、一番福争奪戦
昭和18(1943)	一番福争ひ、吉例の一番福争奪戦、一番福(東條洋三君)、二番福(上原平一君)

3紙に共通するところは、昭和10年代になると詳細な記述が多くなることである。大阪毎日新聞の開門神事の記事として特徴的なのは「福男」の語を初めて出している点である。昭和14年から16年の3年間であるが、「福男」の語を「作り出し」た。例えば私が前回の報告で述べた、昭和15年の多司馬兄弟の兄弟愛<sup>22</sup>に関する記事も以下のような記述である。(大阪毎日新聞阪神版 昭和15年1月11日)

「(多司馬玖一氏は)兄は福男の意気で戦線で活躍してゐる今年もお前の銃後の務の一つは福男を守ることだ、戦線で祈つてゐるからしつかりやれと聲援のたよりがありました」(記事2)

他紙は終戦に至るまで、この語は出していない。そのため、当時の参加者がその語を使っていたのかなど不明な点が多いが、現在開門神事自体のことを「福男」と呼ぶ地元氏子地域の人も多い。この記事以降、すぐにこの語が普及したとは考えづらいが、開門を待つ名物”福男”(昭和15年)と言う様な参詣客のことを指しているのか、それとも現在の「開門神事」の語で語られるような、祭事自体を指

しているのか分からない使われ方あり、直接の関係はないにせよ、後世につながる用語の創造を行つたと考えられる。

記事1：昭和14年1月11日の大阪毎日新聞

もう1つ、3紙ともに用語が戦争の拡大と同時に勇ましいものが付け加えられていることが分かる。争奪戦、拂曉、勇士、といったものが一番福、一番詣りという語に付随している。それと同時に「トライ」や「スクラム」、「タックル」、「レース」などの体育用語が多用されるようになっていくところから、特に昭和10年代からは、スポーツ的なスピードの速さにかなり注目が集まっていることがここから読み取れる。次項では当時の世相などを考慮した上で、なぜここまで大きく報道されるようになったのかについて考察を行つてみたい。



[illegible][illegible][illegible]

## 6、昭和 12 年の開門神事の取り上げられ方

前回の報告でも述べたように、日中戦争の本格化、および太平洋戦争の開戦によって次第に、開門神事および十日戎自体が軍国色を持って報道されることとなった。本報告では、神戸、大阪朝日新聞、そして大阪毎日新聞も昭和 12 (1937) 年の記事はそれまでよりも大きく、この開門についてスペースが割かれていることに言及した。

[illegible]

実際に記事3から5を見ると分かるように、各紙とも大きくスペースが割かれている。神戸新聞、および大阪朝日新聞では9日の宵戎の様子を示した写真が挿入されており、より臨場感あふれる紙面になっている。特に大阪朝日新聞は阪神版であるが、紙面右上の配置であり、重要な情報として報道されていることが考えられる。なぜ、3紙ともこのように大きく紙面を割いて報道されるようになったのか、当時の西宮神社、阪神間を取り巻いていた事象とともに考えてみたい。

まず考えられるのが、西宮市の産業都市化である。以下の表は昭和6(1931)年から13(1938)年までの西宮市の産業総額および人口の変化である<sup>23</sup>。

表5：西宮市の生産総額の変遷

年度	農産	畜産	水産	工業	総額
S6	44,634	32,720	199,210	13,317,430	<b>13,513,994</b>
S7	49,588	35,537	180,152	16,714,567	<b>16,979,844</b>
S8	300,068	495,904	227,567	41,869,634	<b>42,893,173</b>
S9	309,422	740,775	212,814	47,870,887	<b>49,133,898</b>
S10	323,652	1,025,039	291,711	57,900,754	<b>59,541,156</b>
S11	349,361	1,005,892	450,889	67,143,496	<b>68,952,867</b>
S12	310,448	1,277,771	71,441	72,778,251	<b>74,449,573</b>
S13	323,128	1,761,443	70,224	73,371,344	<b>75,531,084</b>

表6：西宮市の人口の変遷

年度	本籍人口	男性人口	女性人口	人口
S6	24,282	21,527	22,023	<b>43,550</b>
S7	25,078	22,100	22,627	<b>44,727</b>
S8	40,955	40,185	41,432	<b>81,517</b>
S9	32,256	40,917	42,616	<b>83,533</b>
S10	32,584	44,008	46,673	<b>90,681</b>
S11	43,838	45,814	48,595	<b>94,409</b>
S12	45,341	47,635	50,534	<b>98,169</b>
S13	47,655	49,374	52,385	<b>101,759</b>

上の表でまず人口増加、産業額の上昇が著しいのが昭和7年と8年の間ということになるだろう。これは昭和8(1933)年の4月1日に隣接町村であった武庫郡今津町、大社村、芝村を合併したことによるものである。これらの地域は、合併前の西宮市と比べると農村地域であり、阪急電鉄による住宅地の開発も始まっており、産業では農産額が増えているのが分かる。今津地域などは工業地帯であることから工業生産額も飛躍的に伸びている。

その他に目を向けると、昭和11(1936)年から12(1937)年にかけて水産業が激減している<sup>24</sup>ほかは、比較的コンスタントに上昇が続けていることが分かる。前回の報告書でも挙げた歴史的要因をこの時代にあてはめるとするならば、阪神電鉄や阪急電鉄による住宅地の開発やターミナルマーケット(阪急百貨店など)の開設などがある<sup>25</sup>。昭和9(1934)

年から10(1935)年にかけては7,000人増加、昭和13(1938)年には総人口が10万人を突破し、名実ともに阪神間の中心都市として成熟してきていた途上、この昭和12(1937)年とすることができるだろう。工業の発達も昭和9(1934)年以降、着実に伸びてきていることが分かる。

同じ昭和12(1937)年1月10日の神戸又新(ゆうしん)日報では、神戸の事例であるが以下のような記述がある。

「この三月の卒業期を期してドツとばかりに浮世に押し流される若人の数は男、女、小、中学生を合して(神戸)市内で約一萬だが、就職地獄どこ吹く風と素晴らしい景気だ、中でも次の時代の工場第一線に立つべき幼年工候補である各高等小學校生は、まるで引つ張り風の大人気電工業界川崎造船所を初め川西機械製作所、阪神鐵工所、神戸製鋼所では(1月)十五日から二十日迄願書受付、また日本紡機、日本発動機、小泉製麻、山陽工作、川西航空と、何れも軍需景気を謳歌する軍工業界では二月上旬から三月上旬にかけて要請工の採用試験を開始し二千名近くを採用とあるがこれに反して卒業する高小生は僅かに千五百名で、目に見えた五百名の不足」

とあり、この当時、阪神工業地帯は重化学工業を中心とする第二次産業革命の只中であって、好景気であることが読み取れる。

そして、この好景気が軍需に支えられていること、つまり日本が次第に日中戦争(昭和12(1938)年7月7日～)へと進んでいく過渡期であることも忘れてはならない。面白いデータとしては西宮市内の愛国婦人会の数の変遷がある。

表7：西宮市内の愛国婦人会の会員数の変遷<sup>26</sup>

年度	有功章	特別会員	通常会員	賛助員	計
S5	4	73	535	2	<b>614</b>
S6	16	133	854	4	<b>1,007</b>
S7	20	133	854		<b>1,007</b>
S8	40	182	1,604	8	<b>1,834</b>
S9	61	382	1,451	11	<b>1,905</b>
S10	61	382	1,451	11	<b>1,905</b>
S11	183	533	4,136	4	<b>4,856</b>
S12	193	503	3,885	4	<b>4,586</b>
S13	222	738	4,637	4	<b>5,061</b>

昭和7年から8年の合併による増加も大きい、それよりも大きな増加は昭和10年から11年である<sup>27</sup>。爆発的な増加をしており、時局に社会がどう反応していたかを示している。先述した昭和10年から大阪朝日新聞などで開門に関する記事が出たこととの相関関係は直接ないだろうが、当時の風潮を読み取ることは可能であろう。

もう1つこの軍需、軍国化に関して考えるならば、この1月10日と言う日が新兵の入営日に当たっていたこともある。記事3で少し見られるが、「西宮の壮丁晴れの入営」とあり、その隣の記事は、その入営のおかげで輸送機関が年



始の初詣から大忙しであることが書かれている。時局を反映し、入営日にも重なったこの神事が、開門そのものが生み出す非日常性から、門から拝殿にたどり着くスピードを重視したものへと、記者が読み手に合わせて変化させていった、そのことによって参加者も神事に関する意識の変化を始めていったということは考えられないだろうか。



写真 1：昭和 9 年までの拝殿<sup>28</sup>



写真 2：新調された拝殿 (1) <sup>29</sup>



写真 3：新調された拝殿 (2) <sup>30</sup>

昭和 9 年には、主催者である西宮神社にも大きな変化があった。それは拝殿の新調である。(写真 1 から 3) 当時の好景気から、新調されたということもあるだろう。そのことにより、新しくなった神社としてもより多くの参詣者に来てもらうために、何がしかの行動に出たとも考えられる<sup>31</sup>。

新しくなった拝殿、戦時特需による好景気、そしてその戦争によって、これまでよりも「競争」という部分に焦点が置かれるようになってきたことが、この年の記事の大きさに反映したことが大いに考えられる。これらの記事に触発され、より多くの人が参詣に訪れる。それまでの西宮の祭りから阪神間の祭りへと変容していったその転換点が、まさに昭和 12 年であったのではないか。

「開門」もその流れの中で、その速さがあるゆえに多くの記事へと書かれていくこととなった。次項では、その速さの中で書かれた「開門一番詣り」の主人公「福男」へのインタビューから、当時の情勢と祭りの様子、そしてその「福男」が当時、そしてその後何を考えていた、もしくは考えたのかについて述べてみたい。

## 7、昭和 20 年の一番福

この項では、昭和 20 年の一番福に関して述べる。大阪朝日新聞阪神版では昭和 20 年 1 月 11 日に出ている。開門神事が載っている同じ面には「巨翼を切り裂く」と題し B29 に体当たり戦法で挑む日本軍機の紹介、または「空襲時、防火水槽に避難した人が水死しないために梯子を取り付けよ」などと言った提案などが載っており、まさに戦時色一辺倒である。十日戎の記事はタブロイド版であることもあり、最低限の情報を述べるにとどまっており、とても小さくなっている。以下の通りである。

「十日戎 防空服装で戦勝祈願の決戦色氾濫 西宮神社の十日戎は早曉から戦勝を祈る参詣者がつめかけ、ぼゞ昨年に近い人出を見たがいづれも防空服装に身を固めて緊張、遠来のものは少く。また例年のごとく輸送陣を混乱させるやうなこともなかつた 境内には方面委員提唱の軍用機献納資金募集や西宮郵便局から出張した数班の弾丸切手賣場が時局色を濃くしともに非常に好成績ぶり、なほ恒例の拂曉一番参りは市内川西町の上田研蔵君が獲得した」

この年の十日戎の後、西宮市は大空襲を受ける。その被害によって西宮神社の拝殿、本殿共に南大門なども焼けてしまい、門を閉めきつての「居籠」が出来ない状態であったため、ここから数年間は居籠りなしの十日戎が催行されることとなり、戦前の形へと復活するまでに、数年間を要することとなった。

つまりこの上田研蔵氏が戦前の居籠を行った形での最後の一番組である。1999 (平成 10) 年夏にお会いすることができ、話を聞いた<sup>32</sup>。

上田 研蔵氏が、「一番福」となったのは、昭和 20 年 1 月 10 日のことである。当時彼は関西学院中学 (現関西学院高



等部) 5年の時であった。このとき彼は初めての挑戦ではなく、その2年前(昭和18年)に三番福、1年前(昭和19年)に二番福を取っていた。ちなみに昭和18年の一番福の東條洋三氏(1995年1月17日震災にて死去)とは、小学校時代、先輩、後輩の間柄であったこともあり、参加する数年前よりこの開門行事に関しては知っていた。

氏が初めて十日戎に行ったのは、小学生の時であり、親に連れて行ってもらったとのことである。境内で開催していた「木下サーカス」を観た記憶があり、当時の大排気量のモーターバイク「インディアン」を使つてのバイクサーカスがやっていたことなどから、いつもとは違う「お祭の時間」がそこにはあったとのことである。



写真4：昭和20年一番福 上田研蔵氏(1999年)

そして中学生(現在の高校生)となり、この十日戎に関して上田氏に強く印象づけさせるようになったのは、「一番参り競争」でもらうことのできる商品の多さだった。その中でも特に「米俵一俵」は魅力であったとのことである<sup>33</sup>。実家は貧しくはなかったが、都市部で食料統制を受けており、「米俵」というのは魅力的に映った。

それから、1月10日表大門の開門を待つようになった。毎年1月10日は午前3時頃には起き出して、並んでいた。そして結果は昭和18年が3位、19年が2位という結果であった。

上田氏は、昭和18年の旧制中学3年生の終わりの辺りから、学徒動員で、今津の川崎製鉄に「出勤」していた。もちろんこの昭和20年1月10日も働く事となっており、「出勤途中」にこの一番福競走に出ようと思ったとのことである。その為、友達と一緒にその日は午前4時頃から門の前で待っていた。

上田氏が参加した昭和18年から20年の開門に関しては、各人のスタート位置など決まっていなかった<sup>34</sup>。いわば喧嘩

をして、良いスタート地点をとった<sup>35</sup>。そのため「腕力」が非常にものをいった。この神事では、走る速さと共に、「いかに自分のスタート位置が門の中央にあるか」で決着が付いてしまうので、このポジショニングに関しては各人が特に必死になって行っていたようである。

上田氏は前年、前々年も、好成績を収めていた。そのため、かなり要領を得ていた。彼の秘策として、ちょうど自分の体が門の中央に来るとみんなが押し合いへし合いしているのに関わらず、「座った(屈み込んだ)」のである。上田氏いわく、「これが勝った原因だった」。

つまり、座ったことで周りに流されることなく、低い位置で「真ん中の最良の位置」を守りきった。また現在の開門神事と違って、門の敷居が高かったこともあって、始めの出だしで転ぶことも多く、その対策も兼ねていた。つまり門が開くとすぐに「カエルのように飛び出して、その後突進する」ことができるようにしていた。

結果としては、この研究され尽くしたポジショニングで、彼は見事「一番福」を獲得した。先述の様にこの頃の一番福は、3本垂れ下がっている綱(一番福はその中の中央に)につかまって初めて鈴を鳴らした者を一番はじめに願いを聞いてもらえる者ということで「一番福」としていた。

一番福の副賞<sup>36</sup>は、戦時色濃い時期で、米俵はなかったが、2つ重ねの直径30cm以上の鏡餅、福笹、お札、落雁などであった。餅は、外米が混入していたものの、家人にはかなり重宝がられたとのことである。翌日の新聞にも載ることで、親戚からも戦時末期であるのに関わらず電話がかかってくる位「人気者」にもなったとのことである。様々な意味で名譽的なことであったと語られた。

彼が一番福を取った後、西宮神社は、拝殿、本殿ともに焼け、この神事自体の復活は、数年待たなければならなかった。しかしその復活した数年後、彼は大学に進学したために走ることは物理的には可能だったが、その後一度も走ることにはなかった。

その訳は、彼が、関西学院大学に入学し体育会拳闘部でキャプテンとして、日本拳闘界で大活躍し、時間が取れなかったことも挙げた。しかしそのことよりも「自分が最後の一番福」とのプライドがあったためであると主張した。

つまり、拝殿と、本殿が焼けたことで、昔からの「えべっさんではなくなり」昭和20年の1月10日に上田氏がその年にはじめてお参りした戎様と、現在の戎様とは違うものとして考えたいということである<sup>37</sup>。

いくら足の速い選手がいても時間までは乗り越えることは出来ない。再生産できない「最後の一番福」であるとの思い出を心に納めておきたいと考えたのではないだろうか。

昭和20年、西宮には大空襲があったと先述した。その時、上田氏の住んでいた川西町(香榎園)も焼夷弾による空襲を受け、火の渦に巻き込まれた。

しかし運がいいことに、彼の家を含めて彼の家の周り5軒のみが焼け残ったということである。終戦以降、焼け残った家の住人は、「一番福がいたおかげ!」<sup>38</sup>と感謝された

とのことである。

その後、大学拳闘界で大活躍し、社会に出て大成功をおさめ、社会的にも会社社長を勤め上げた。

しかし上田氏は、これらのことを「一番福のご利益」とは決して話さなかった。もちろんこれまでの人生で「神懸かり」的な部分もあったとのこと。しかし、より強調されたのは、その一番福になるために努力した探究心、失敗をおそれずそこから問題解決の糸口を探り一番福にたどり着いた経験などが、将来の教訓となり、そして自信となって、自身の人生を築いていったとのことである。「一番福競争」での競争意識が、自発的な向上心を産み出すものとなっていった。上田氏の座右の銘であった「失敗を恐れるな！しかし同じ失敗を二度三度するな」というのは、まさに、この神事に挑戦したことが起点となっている。

特筆すべきことは、一番福になって以降、社会人となり、家庭を持って以降もインタビュー当時まで、十日戎の 3 日（宵戎、本戎、残り福）は全てお参りを続けたことである。

上田氏はインタビューの最後にこう言われた。

「もちろん正月も祝います。だけど、やはり十日戎へ行かないと年が明けた気がしない。だからこそ、3 日（9,10,11）はどの日も十日戎に行くのです。」

脈々と波打つ「一番福」の血が、上田氏の体を駆けめぐっていた。はじめの開門神事の動機としては、米俵などの副賞であった。しかし、それだけで走ったのだろうか。もしくは一番福になって副賞を得てからも、なぜ亡くなるまで毎年の十日戎の 3 日も参詣していたのであろうか。

それは彼の中の「年中行事」として確実に新暦の十日戎が入り込んでいたからではなかろうか。青年時、門が開いた時に感じた高揚感と同質な、西宮神社の十日戎ならではの非日常性が彼自身の生活における「ハレ」を作り出していた。もちろん小学生の時から地元の神社として、お参りに行っていたにせよ、戦時中の「開門」神事への参加が、その後の彼自身にとってのまさに年中行事化する「入り口」だったといえるだろう。

## 8、おわりに・これからの課題とともに

今回の報告で、1930 年代から 40 年代にかけて西宮神社の開門神事がどのような過程によって大きくなっていったかについて述べた。特に昭和 12 年の 3 紙の報道は、多くの参詣客を呼び込む要因となり、その後の開門神事自体、時代の情勢と相まって速さを競う祭りへと変容をし、その書かれ方も軍国調となってきたことの提示を行った。

1930 年代の日本全国における重化学工業の発達、いわゆる第二次産業革命の到来によって、各地方の社会構造の変化や産業都市化が進むこととなった。西宮市に関しては特に阪神工業地帯の中心都市として、それまでの阪神電鉄、阪急電鉄による住宅建設や学園誘致<sup>39</sup>による阪神間の郊外化と相まって、これまでとは全く異質な都市が誕生することとなった。つまり電鉄会社のディベロッパー的な側面の

もたらした結果と国全体における第二次産業革命の結果が、1930 年代の西宮神社の十日戎に変容を大いにもたらしたことが考えられる。恵方の概念はあったものの参詣客は、地元の人から大阪・神戸からの人が多くなり、産業都市化することによって新しい移住者<sup>40</sup>が、開門神事の主役になることも多かった。それと同時にその成長をもたらした戦争が、より「競争」「レース」「先陣争ひ」などといった概念を強調することにもつながった。

しかし、旧暦の十日戎から新暦のそれへと移入される時に一緒に「居籠」が移入されてきたことから分かるように変わらない「芯」が確かに存在した。それは「ミカリ」<sup>41</sup>の感覚である。新聞紙上にも「モー然とタックル」などの言葉で競争のそれへと置き換えられてはいるが、やはりそれは非日常の場だからこそ起こりえることである。最後にインタビューを行った上田研蔵氏も門前でケンカをしながらも門が開くのを必死に待って、開門する瞬間に備えた。そこで得た「何か」が戦後の彼を 1 月 9 日から 11 日までの年中行事としての十日戎の参拝へと動かしていった。前回の報告で述べた、戦後疎開していた時期を除き、365 日西宮神社へ参拝し 10 日の午前 6 時にも必ず参加していた初代「福男」田中太一氏<sup>42</sup>ではないが、同じ感覚を感じる。この祭が、彼らにとって「ただ一番になるだけのものではない」ことを彼ら自身の行動でもって証明しているのではないか。

これからの課題として、この神事の変容していく過程とともに開門神事の持つ不変性を資料・史料を通じてたどっていききたい。今回の報告でも新聞資料の欠落、および先行研究の見落としがある。更なる資料収集と先行研究の言説の確認を行っていききたい。新聞資料では限界があるが、地元西宮を中心とした人たちのインタビューを入れていくことで、今回の言説である「神事は大きく変容したけれども、機能的な部分は変わらなかった」という補完も行っていきたいと思う。

この後の研究としては、今回の報告の補完とともに戦後の開門神事、とくにどの様に復活させていったのか、そして参加者はどのように再び参加することとなったのか、新聞資料などを中心として調査していきたい。調査年代が新しくなることで、インフォーマントも多数現われてくるだろう。参加者としてではなくこの行事に長年携わってきた地元の人たちや神社関係者などにも積極的なインタビューを行うことによって、これまで私が気付かなかったものを見つけ出してこれからの主張へとつなげていきたい。

<sup>1</sup> 平山昇「明治・大正期の西宮神社十日戎」『国立歴史民俗博物館研究報告第 155 集』2010/3、p.p.151-171

<sup>2</sup> 大江時雄『ふびすの旅 一福神学入門-』1985、海鳴社

<sup>3</sup> 平山前掲書 p.p.165-169 開通直後（明治 40 年代）から、阪神電車は十日戎に関しては終夜運転を行った。旧来の「モノイミ」「イゴモリ」を行うために、門を閉じたい神社側（明治 32 年には「旧暦 9 日午後 6 時閉門」であった）との葛藤である。明治 40 年（1908 年）の旧暦十日戎の神社日誌では「当日参（詣）者非常ニ多ク、夜八時閉門後モ電車停留場ヨリ門外迄陸続群集セリ」との状況であり、大正 7 年

(1918 年)の新暦十日戎における日誌には、12 時に閉門したが門の外には参詣できなかつた人がたくさん集まって不平を鳴らして怒っていたとある。

<sup>4</sup> 平山前掲書 p.p.161 この改正は新聞などでは「太陰暦廃止」「旧暦廃止」「新暦施行」と称された。いかにこの当時の人たちに衝撃を持って受け入れられたかということを論じている。

<sup>5</sup> 特に平山氏の論考では、旧暦併記廃止当時の西宮神社の十日戎の形態について詳しく述べられている。それは、これまで行われてきた新暦・旧暦というに種類の祭りをするのではなく、「新暦と旧暦の 2 月 10 日にもう一度行う、月遅れ十日戎」の 2 回を行うとの方針であった。しかし、旧暦で動く農村部の人たちからも受け入れられることはなく、結果としては終戦後まで「新暦と旧暦」の 2 つで行うことになったとある。旧暦で祝う人は農村部に多く、そのために官鉄が大いに活躍し、阪神電鉄開業からは新暦の十日戎が都市部で生活する人の祭りとして認識され阪神電鉄が大いに使われた。そして、新暦十日戎が旧暦のその規模を凌駕していくこととなる。規模については、昨年度の拙稿「十日戎開門神事の歴史の変遷」内の神社での神像等配布数で見ると明らかである。

<sup>6</sup> 大正 7 年 2 月 20 日の大阪朝日新聞神戸附録では、「西宮の新十日戎は世間一般の好景気にて未曾有の賑わひを呈したが二十日の舊十日戎も昨日の宵戎から近郊農家の参拝者例年より多く露店も相當に賑ひ新の十日戎に参詣しなかつた連中は此の日こそ福の神を授からんと押し掛けたので縁起物もよく売れたといふまた兵庫柳原の戎神社は昨日の宵宮より相當賑ひあるも一月ほどは盛りならず」とある。

大正 7 年は大戦景気で、「未曾有の好景気」だったこともあり、新暦十日戎では多くの参詣者が開門後も残ってしまったが、この記事から旧暦でも多くの人が西宮に参詣した事実が分かる。新暦の祭りによって多くの参詣客が来るのと同時に「旧暦の十日戎は西宮」との認識が阪神間でなされていたといえよう。旧暦併記廃止の 1 年前の明治 42 年の 1 月 11 日の「大阪朝日新聞神戸附録」では

「西宮の十日戎は陰暦を主祭とする為か参詣者割合に少く十日は日曜に當りし為遊散旁の参詣客に過ぎざりしも阪神電車は今宮行の客相當に多く各停留所とも多少の雑踏を見たり為に尼崎及び御影署よりは取締りの為巡査を派し又車中にも正服私服の巡査を乗込ましめ拘摸喧嘩等の警戒を加へ居たり」

という形であり、あくまで主祭ではないものの、人は集まりだし、電鉄会社はその輸送能力を生かして、神戸(柳原)、大阪(今宮)そして西宮を繋いでいたことが見て取れる。電鉄はもちろん人を運ぶことと同時に、その参詣客を通じて、大阪・神戸両都市の祭礼の様子を伝える役割を果たしていたのではとも考えられる。ただ、明治 43 年 1 月 10 日の「大阪朝日新聞神戸附録」では

「西宮の戎神社が例年の新十日戎祭典を初祭りと改稱して九、十、十一の三日間祭典を執り行ふに就き汽車電車にて参詣の客が群集せることは本紙記載の如くなるが右に付阪神電車は神戸大阪雙方より西宮までの賃金を二割引とし尚電車を増発して一日八百何十回と云ふ往復をなすより豫じめ危険防止として沿道の各警察署は所轄内の電車停留所に一名若くは二名の巡査を出張せしめて警戒し居れるが会社にて常務の車掌運転手の外目下京阪、箕面両電鉄より見習いとし警戒中の車掌運転手数十名を各停留所に其の他踏切に配置して是亦警戒を加へ居れりと昨九日の如き午後よりは非常の人出にて夜に入るまで混

雑したり」

とあり、政府の旧暦併記廃止の通達による社会的な影響が非常に大きかったことが、今回の平山氏の論考を読むことで改めてうかがえる。実際に西宮への参詣者が神戸(柳原)よりも多かったために列車での事故(会社員が十日戎参りのあと、酩酊のあまり脇の濱一岩屋間走行中の列車乗降口から誤って落ちて負傷した事故が、1 月 11 日の新聞に書かれている)も起きている。

<sup>7</sup> 荒川裕紀「西宮十日戎開門神事における歴史の変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 43 号 2010/1、p.p.108

<sup>8</sup> 平山前掲書 p.p.167-168

<sup>9</sup> この広告での書かれ方は「古例に則る居籠祭 午後十二時迄開門」とかかれ、終夜運転によって参詣客を増やしたい電鉄側の考えがあるとのことを平山氏は提示している。

<sup>10</sup> 荒川前掲書 p.p.108

<sup>11</sup> 明治 43 年 1 月 10 日「大阪朝日新聞神戸附録」

<sup>12</sup> 米山俊直『都市と祭りの人類学』1986、河出書房新社、p.p.204

<sup>13</sup> 田中太一氏に関しては、拙稿「十日戎開門神事考」米山俊直編『—えびす信仰研究会報告—えびす信仰の謎をめぐる』2001/12、大手前大学 p.p.35-70 などで述べている。

<sup>14</sup> ちなみに神社側の日誌で、一番福の名前が出るのは昭和 13 年の田中太一、尾松新之助両氏の同着からである。ただし、神社側の日誌の中では彼らは、「先登第一は」という書かれ方をしており、「一番福」「福男」などの語は、みられない。

<sup>15</sup> 清田三郎氏に関しては、当時の住所が西宮神社近辺であるために、神社関係者にも聞いたが知られていない。

<sup>16</sup> ただし、大正 10 年の 1 月 11 日の大阪朝日新聞神戸附録では 10 年も

「八、九百の群集が寒そうに詰掛けたに過ぎずして吾一に雪崩込む例年の活気をを聊か削いだ憾みがないでもなかつたが熱心な者は矢張り午前の三時頃から押掛けて居た者もあつた」

とあり、実際に走る人数が数千であった訳ではない。

<sup>17</sup> 例えば、大正 12 年の 1 月 11 日の大阪朝日新聞神戸附録では、「馬鹿に淋しい本戎」との題で

「十日の西宮戎神社の本祭は豫想通りの寂しさであった、群集の流れに吸い込まれて見物半分参詣者で押すな押すな参詣道も例年に比較して 2、3 割人数が少ないやうで、楽々とお詣りできる」

という様に景気、人の入り具合などが主で、門が開いて福を得るために駆けるといった記事が見られない。

<sup>18</sup> 荒川前掲書 p.p.111

<sup>19</sup> 同じ年度ではあるが記事で表大門(現在、赤門と呼ぶことが多い)を「正門」と「赤門」と違う呼称で称している。他紙では、「正門」「東門」の記載が多い。現在の神社関係者の中では東門とは、表大門の北側にある表大門に比べると、小さい門のことを指す。

<sup>20</sup> この方法は、近年になって変更が加えられたものである。鈴縄もつい最近まで 3 本あったのだが、1998(平成 10)年に 1 本になり、そして現在の形に変化したのである。これらの変更点の詳細に関しては次回以降の研究報告で述べていきたい。

<sup>21</sup> 昭和 18 年の一番福(当時旧制尼崎中学 4 年生)である東條洋三氏(1995 年 1 月の阪神大震災で亡くなられた。)の御遺族によると、彼の生前の話として 3 本の鈴縄の真ん中、つまり東から進入して手前から二番目の鈴縄が「一番鈴」であったとのことで、前年も一番で拝殿に入ったもの



の、入って最初の鈴をつかんだために、一番福になれなかったことがあったと話されていた。

<sup>22</sup> 荒川裕紀「西宮十日戎開門神事における歴史の変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 43 号 2010/1、p.p.112-113

<sup>23</sup> 西宮市役所『西宮市勢要覧 (昭和 14 年版)』1940、西宮市役所および『西宮市勢要覧 (昭和 16 年版)』1942、西宮市役所を基にして作成。

<sup>24</sup> もともと、西宮は西宮神社の祭神戎様が漁労神であったところからも分かるように漁業の盛んな街であった。干鰯は「宮じゃこ」として名物であった。(堀内治『西宮懐古写真集』1975、中外書房 p.p.42) この時の急激な衰退は、昭和 10 (1935) 年の港湾整備などとも関連する、市の工業化によるものなのか、水産加工業を工業に加えたための数字上のものなのか、精査する必要がある。

<sup>25</sup> 『西宮市勢要覧 (昭和 16 年度版)』によると昭和 15 年の省線西宮、阪神西宮、阪急夙川の各駅の 1 日平均の乗降者数はそれぞれ 8,583 名、8,152 名 (乗車人数のみ)、6,994 名である。鉄道は昭和 9 年 7 月に「省線電車」として電化されたのだが、その年の 1 日平均の乗降者数は 4,780 名だった。そこから考えると、省線だけでも 4,000 人近く増加しており、西宮市の阪神間における郊外化も進展していることが分かる。なお、阪急電鉄で現在西宮市内における最大駅である「西宮北口駅」は当時は瓦木村であったために市勢要覧には含まれていない。

<sup>26</sup> 西宮市役所『西宮市勢要覧 (昭和 14 年版)』1940、西宮市役所 p.p.106

<sup>27</sup> この時期には国防婦人会などの別組織も出来ており、昭和 17 年にこれらの団体が統合され、大日本婦人会となる。この項目の「愛国婦人会」が別組織の国防婦人会なども含めていたかについては不明。

<sup>28</sup> 堀内前掲書 p.p.48

<sup>29</sup> 同上

<sup>30</sup> 西宮市役所『西宮市勢要覧 (昭和 14 年版)』1940、西宮市役所 前書より。現在の拝殿は戦後および阪神大震災後に復興したものであるが、当時と似た形になっている。この写真の右の門 (新聞紙上で書かれている拝殿の唐門) から、一番詣りの参詣者は走りこみ、鈴を鳴らしに行った。現在は写真左側の拝殿の正面から入りこむ。この変遷については次回以降 (戦後) の報告で詳しく紹介したい。

<sup>31</sup> 平山前掲書 p.p.164 「西宮神社は旧暦十日戎の挽回を図るべく阪神電車に協力を求める様になった」とあるように、明治期から広告を出したり、電鉄会社に働きかけたりすることによって、参詣客の増加に努めていたことがわかる。この昭和 10 年代の神社側の思惑は分からないが、社殿の新調の宣伝とともに、参詣客の増加を狙って時勢に合致した、この躍動感の溢れる開門一番詣りに着目して新聞社に働きかけたことは大いに考えられる。

<sup>32</sup> 調査を始めた当初から、上田氏にはご存命ならばぜひとも話を聞いてみたいと思っていた。しかし戦前の住所からは転居されており、会うことは叶わないと感じていた。私が開門神事の調査をはじめた 1997 年から、少しずつ新聞社などの取材が来るようになり、いくらかが記事となった。その記事を上田氏が読んでくださって、新聞社に連絡されたことからご縁が生まれた。学生時代にボクシングで鍛え上げられた体躯から元気が、1999 年当時はみなぎっていらっしやったが、その後数年で急逝された。非常に悔やまれる。時代は違えども、私も参与観察で十日戎開門神事には何度も参加しており、その点からも話が進んだ。調査者と被調査者という関係を超えて、開門神事の先輩から後輩

へとメッセージを託すのだという思いがとても強いインタビューだったと感じる。その思いをこれからも生かしていきたい。

<sup>33</sup> 昭和 18 年の一番福東條洋三氏のご遺族も、東條氏にとってこの一番福の副賞がとても魅力的で、開門を待って走ったと生前話していたとのことである。

<sup>34</sup> インタビューした当時の 1999 年 (平成 11 年) の頃の十日戎開門神事では、門前に早く到着したものから、開門時のスタート位置を決めることとなっていた。これは、1990 年代中盤から漠然と決められた暗黙のルールであったため、次第にその「早く来る」ことがエスカレートした。2000 年以降になると、テントを張って寝泊りしながら開門の場所を取るグループが出始めた。そのこともあり、2005 (平成 17) 年からでは西宮神社と氏子、そして神事の保存会から発展した開門神事講社が一体となって、一度抽選をして場所を決める方法を採用している。本来ならば、抽選などをせずに、みんなが「ミカリ神事を体験」し「福を得られる」神事として催行するが最良であるが、昨今の神事の加熱からこの方法を採らざるを得ないことになっている。

<sup>35</sup> 「そら、ケンカでしたよ。力で押して、我先に前に行きたがったですからね、みんなが」とのことであった。

<sup>36</sup> 副賞について言及されているのは、新聞紙上では昭和 15 年の一番福多司馬玖一氏に兄圓之助氏へのお守りが特別に授与されたことが最初である。しかし、昭和 18 年などでは副賞に関する記載は書かれていない。1 つに当時の新聞紙面の節約の問題があったこともあるが、意図的に新聞がそのことを伝えなかったことも考えられる。ただ、インタビューをした東條氏のご遺族や、上田氏などから米俵や鏡餅などの具体名が出ていることから、西宮神社周辺においてはある程度何が副賞としてもらえるのかということは口伝で伝わっていたことが考えられる。

<sup>37</sup> 昔と今では「えべっさんが違う」というのは、当時の私に分かりやすく話してくださった言い方かもしれない。つまり祭りの場が、戦時中に走っていたものとは変質してしまっていると感じ、走らなかった。より踏み込んで、危険をおかして言うならば、あの時彼が感じる事が出来た「イゴモリ、ミカリ」の感覚が、感じられなくなったからではないだろうか。

<sup>38</sup> 終戦以降だったのは、戦時中、戦災に遭わなかったことを福運であるとはとてもいえる雰囲気ではなかったこと。昭和 20 年の開門神事で得た「福」の対象が個人のためではなく、あくまで「国に対してだった」と語られた。

<sup>39</sup> 学園誘致に関しては関西学院や神戸女学院などが阪急沿線 (この 2 学院に関しては現在の阪急今津線、当時の西宝線) へと移転させていった。その移転によって安定的な乗客数確保へとつなげることができたと同時に沿線地区が文教都市化していくことにもつながった。

<sup>40</sup> 例えば、上田氏のいた香栢園地域は、もともと明治の晩期に遊園地として開発された場所であった。その後大正期になって、北は夙川から南は現在の香栢園地域までが住宅地として開発されていった歴史を持つ。昭和 20 年の一番福上田研蔵氏が、1930 年代に阪急電車の甲陽園線で夙川―甲陽園まで乗車し、山を越えて上ヶ原の関西学院まで通っていたところは、まさに郊外化された西宮市の中で育っていらっしやったことを、インタビューしてから 10 年以上たった今になって改めて感じる。

<sup>41</sup> 荒川前掲書 p.p.106-107

<sup>42</sup> 荒川前掲書 p.p.112

(2010 年 10 月 15 日 受理)